

レコードキーピング／アーカイビングとその担い手 に関する理論的研究：レコード・コンティニユウム 理論からのアプローチ

清原，和之

<https://hdl.handle.net/2324/6787684>

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（ライブラリーサイエンス），課程博士
バージョン：
権利関係：

氏 名 : 清原 和之

論 文 名 : レコードキーピング／アーカイビングとその担い手に関する理論的研究—レコード・コンティニューム理論からのアプローチ—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

行政機関から民間の企業、各種団体から家族まで、あらゆる組織体はその活動の過程で文書を生み出し、それらは何らかの必要性ゆえに保存され、あるいは廃棄される。こうした社会のなかで営まれる業務や活動の記録の総体をアーカイブズと呼び、それを管理・保存・利用提供する専門職はアーキビストと呼ばれる。このアーキビストによるアーカイブズ管理のあり方は、20世紀末に電子記録への対応から根本的な変容を迫られるが、オーストラリアで現れてきたのが、記録の作成から管理、保存、処分までを一元的、かつ、包括的に捉える「レコードキーピング」という概念であった。そして、記録の生成から組織内での管理、さらには、公共空間での共有に至る一連の過程と、その記録に意味を付与する諸主体の諸行為を統合的に捉える理論モデルとして提示されたのがレコード・コンティニューム理論であった。この理論基盤に基づき、アーキビストには、従来のような業務完結後に事後的にアーカイブズを管理・保存する役割だけでなく、証拠としての記録が業務遂行の過程で適正に作成され、維持・管理され、処分されるために、記録生成段階への介入が不可避とされ、レコードキーピングの包括的な枠組みを設計することに積極的に関与する役割が求められている。しかしながら、記録というものが様々な主体によって多様な意味を持ちうるとすれば、何を記録として生み出し、どのくらいの期間保持し、何を選別廃棄し、どのように整理し、何を公開するのか、といった諸決定は、アーキビストや記録作成者だけではなく、多様な主体に開かれているべきではないか。

こうした問いに対し、本論文では、レコードキーピングという概念を批判的に検討し、レコード・コンティニューム・モデルは現代の諸課題にいかに関与しうるのか、その有効性を検討した。また、諸活動の記録を管理するためのレコードキーピングと、それと表裏をなす、様々な範囲での記録の共有としてのアーカイビングのための意思決定には誰が関与し、その諸主体間での合意形成はいかに可能か、という問題を考察した。

第一章「オーストラリアにおけるレコードキーピング実践とコンティニューム理論の生成」では、レコード・コンティニューム理論の本質を、それが生み出され、発展・深化してきたオーストラリアのアーカイブズ機関の形成過程のなかに探り、その上で、「レコードキーピング情報学」と「アーカイブ的多元宇宙」という二つの概念から、一貫性のあるプロセス思考の重要性と、記録作成者と記録対象者のような非対称な関係性を乗り越える複数性に基づく新たなパラダイムが目指されていることを確認した。

第二章「現代組織におけるレコードキーピングに関する諸問題—技術、人、専門職—」では、組織におけるレコードキーピングの問題を、従来の制度論的・方法論的観点ではなく、技術と人との相互作用の観点から考察した。こうした観点から近年、注目されるのが、組織の情報文化に重点を

置いた研究であるが、この研究手法を検討し、その上で、コンティニューム・モデルの特性を踏まえた各主体間の論点を把握し、改善の方向性を示すことが、実際の組織のレコードキーピングの問題状況とその改善にも寄与することを示した。

第三章「参加型レコードキーピングと記録の多元的管理の可能性 —オーストラリアにおける「奪われた世代」問題を事例として—」では、オーストラリアのアーカイブズ機関等と「奪われた世代」を含む先住民側との間の、先住民に関わる記録をめぐる問題を事例とし、両者の「和解」の試みの一つである「信頼と技術」プロジェクトを採り上げ、これをコンティニューム・モデルの多元化という観点から検討した。さらに、この「和解」の経験を一般化するものとして参加型レコードキーピング・コンティニューム・モデルを採り上げ、このモデルが諸主体間での意思決定の合意という点でいかなる意義と課題を有しているかについて考察した。

第四章「コミュニティ・アーカイビングと公共性—記録の共有・継承におけるコミュニティと専門職—」では、アーカイブズ機関等の外部でみられるコミュニティ・アーカイブに焦点をあて、ロンドンのサザーク地区の再生事業に反対するアクティビスト・コミュニティの事例から、そのコミュニティのアーカイビングのあり方が従来のアーカイブズ学の方法論といかに異なり、その違いをどのように捉えることができるのかについて、検討した。また、そうしたコミュニティ・アーカイブの営みにアーキビストはいかなる点から関わることができるのか、という問題を、コンティニューム・モデルを適用して公共性の観点から考察した。

以上から、コンティニューム・モデルの複雑性を縮減する分析ツールとしての有効性と、レコードキーピング／アーカイビングをめぐる意思決定においては、諸主体間の複数性に基づく自律性の尊重が求められることを示した。